

【本書を読まれる方へ】

子どもたちと「対話」する、臨機応変の放課後活動

丸山啓史

ゆうやけと村岡さん

ゆうやけと村岡さんに出会ったのは、十数年前のこと。大学3年生の冬でした。養護学校の体育館での土曜日の活動に、ボランティアとして参加したのが最初です。その後、アルバイト指導員をすることになり、大学に行くよりもゆうやけに行くことの多い一年を過ごしました。

ゆうやけや子どもたちにとって自分が何かの役に立てたという実感はほとんどないのですが、ゆうやけは間違いなく私の原点の一つです。私と同じように、ゆうやけで大事なことを学んだと感じている人は、数えきれないのではないのでしょうか。ゆうやけは、子どもたちだけでなく、たくさんの「大人」も育ててきたのだと思っています。

大学の卒業論文では、ゆうやけのお母さんたちにインタビューをさせてもらいました。30周年コンサートの「ブレ企画」のときにお話しされたという、長谷川さんや斉藤さんのお宅にもうかがいました。そのとき、「お母さんの話をじっくり聞く機会はそう多くないから」ということで、村岡さんがいっしょに来てくださいました。

お母さんが、話のなかで、「村岡さんも歳をとるんだから、子どもたちと駆け回ってるんじゃない体がないでしょ。グループホームをつくって、うちの子たちと暮らしてよ」と、冗談めかして言われたのをよく覚えています。あれから10年以上が経ち、今も、子どもたちと「脱線遊び」や「ピストルごっこ」をする村岡さんがいます。

全国放課後連と村岡さん

私が京都教育大学に就職してからは、「障害のある子どもの放課後保障全国連絡会（全国放課後連）」の活動で村岡さんと会うことが多くなりました。全国放課後連は、放課後保障の運動を進めるため、2004年の全障研全国大会（長野大会）の夜に結成された組織です。その事務局長として、村岡さんは活動を中心的に担っています。

村岡さんは、たぶん、制度のことを考えたり、文書や資料を作ったりということが、それほど好きではないと思います。本当は実践にのめりこみたい。そういう思いが強いようにみえます。ただ、子どもたちのことを考えたときに、よりよい国の制度の確立が欠かせない。ゆうやけの子どもたちはもちろん、すべての子どもたちに豊かな放課後を保障したい。その使命感にかられて、軽くない役割を背負ってくれているのだと感じます。

事務局長の仕事は、会議の運営、研修会の準備、ニュースの発行、そのときどきの課題への取り組み、各種の問い合わせへの対応など、はたでみていてもかなりの量です。けれども、もちろん、村岡さんは全国放課後連の専従職員ではありません。厚生労働省との懇談を午前中に終えたあと、「迎えるバスの運転があるから」とゆうやけに戻る村岡さんなのです。ゆうやけのなかでも、村岡さんがしているのは、子どもたちとの活動だけではありません。

そうした激務のなかで、本書は生まれています。その重みを受けとめたいと、私は思います。

臨機応変の放課後活動

全国放課後連の運動を背景に、2012年には放課後等デイサービスの制度が発足しました。放課後活動のための国の制度が創設されたことは運動の重要な成果ですが、単純には喜べない側面もあります。個別支援計画が制度的に求められることになり、村岡さんが「はじめに」で触れているように、「計画」や「目標」に放課後活動が縛られる危険性があります。

村岡さんたちの実践は、最初に設定した目標に向かって一直線に進むものではありません。子どもの気持ちを探りながら、あの手この手を試み、そのなかでまた子どもの理解を深めていきます。その過程には、「予想どおり」のこともあれば、「期せずして」のこともあります。学校の先生の話から気づかされる子どもの姿もあれば、職員集団の議論でみえてくる子どもの思いもあります。

実践は、子どもたちに合わせて形を変えていきます。キーワードの一つは、臨機応変、ということになるでしょうか。それは、ある場面での「遊び心」「思いつき」「機転」であることもあれば、子どもが気持ちを向けるような遊びを新たに展開する工夫でもあります。

子どもの「揺れる心」に向き合うためには、実践者の側にも「揺れ」と呼べるような柔軟さが求められるのかもしれませんが。

子どもたちとの「対話」

もともと、村岡さんたちの「臨機応変」は、単なる「行き当たりばったり」ではありません。本来的な意味でいえば、「計画」がないわけでもないし、「目標」がないわけでもない。丁寧な子どもの理解と、その子どもについての村岡さんたちのねがいが土台にある。そういう「臨機応変」だと感じます。とても意

図的・意識的なものが、そこにはあるはずですが。

だからこそ、本書のような実践記録が生まれるような気もします。実践記録で描かれている場面の多くは、表面的には必ずしも劇的なことではありません。村岡さんたちの意識的な目によって、無数にある日常のできごとのなかから、重要な意味のあることとして拾い上げられているのだと思います。

日々のちよつとしたことからでも、子どもたちの新しい姿を発見し、子どもたちの思いに気づき、実践をつくっていく。それは、子どもたちとのコミュニケーションの積み重ねです。村岡さんたちの実践は、子どもたちとの「対話」といえるものではないでしょうか。

実践の道のりとともに

その「対話」の道のりを、部分的にはあれ、追体験できるところに、実践記録の強みと本書の魅力があるように思います。

迷い、考え、工夫する過程を、村岡さんたちと共有することができます。村岡さんたちは一つの判断をしながら実践を進めるわけですが、「自分だったら、どうするだろう」「ほかには、どういう解釈があり得るだろう」と考えながら読めるところが、本書の各所にあります。そのことによって、小手先の手法などではなく、実践において重要な考え方や発想を、本書から学びとることができるように思います。大切にしたい視点の発見や確認は、大きな力になるものです。

けれども、子どもたちと「対話」しながらの実践に、完成形はありません。ゆうやけの実践もまた、新しい探究をとめないながら、子どもたちの豊かな放課後をめざして続いていくことでしょう。